フランスラグビーのプロ化過程と三つの主要エージェント

オリヴィエ・ニエール *　　守能信次 **

The professionalization of French Rugby, three actors for a play

Olivier NIER* and Shinji MORINO**

Abstract

This article is the synthesis of a common thought with Pascal CHANTELAT and Pierre CHAIX. It presents the four great stages of the process of professionalization of French Rugby. It more particularly exposes how the managers of French Rugby face the advance of the process of professionalism initiated since the end of 1980. The arrival of new actors, in particular the National professional League of Rugby (LNR) and the Trade union of players (PROVALE), has shown the end of monopoly of the French Federation (FFR) in the management and organization of this sport.

During the years 1987-2004. the changes in the definition of the rules of the game to the sporting direction (methods of organization of games) and socio-politic direction (the collective distribution of power and money), was marked by a series of hesitations and inversions of orientation, This indecision mainly arose from confrontation between the union on one side and the professional league on the other. These two organizations were mainly represented by the Presidents of the professional clubs. These entities were in conflict for controlling the "Rugby Spectacle".

The analysis of the projects (talks and documents from the clubs or the union) and of the strategies from the various entities shows that this style of management reveals more about the amount of influence and opportunist strategies of alliance than that of a true governorship based on a common vision of professional Rugby, with forms of cooperation between all entities.

はじめに

フランス・ラグビーのプロ化過程を検討するに当たっては、ラグビーの発展段階を改めて整理しなおし、それにかかわりを示した組織の役割と相互関係を明らかにする必要がある。と

* 中京大学体育学部（客員教授），クロード・ベルナール・リヨン第１大学
** 中京大学体育学部
* Université Claude Bernard Lyon I, Centre de Recherche et d'Innovation sur le Sport (CRIS), Guest Professor of Chukyo University, School of Fitnesse and Sports Sciences
** Chukyo University, School of Fitnesse and Sports Sciences

くにフランスのラグビーは3つの主要な機関（FFR、LRNおよびPROVALE）が主体となってその推進役を果たし、これに国内レベルでは青少年スポーツ省（MJS）が、また国際的には国際ラグビー・ボード（IRB）すなわち国際連盟が管理を行ってきた。本稿はBAYLE（2000）のアプローチに基礎を置きながら、フランス・ラグビーのプロ化過程を段階的に整理しなおすことから、関係機関に見られる力関係、またそれらの協力と競合の関係を明らかにすることを目的としている。

1．FFRの独占時代：1870年～1980年

アマチュアとプロフェッショナルの問題はいつの時代にもスポーツ界に存在した。スポーツ選手が俸給を手にするようになったのは、決して最近になってからことではない。それは自転車競技の世界で最初のスポーツクラブがつくられた1881年以前からも存在したことである（CEBLAN, 1992）。ラグビーにもそうした習慣はあり、「似非アマチュア」と呼ばれた選手はフランス・ラグビーの勃興期から実質的に存在を見てきた。1900年から1995年までのラグビー界の歴史は金銭の話題に溢れており、それはとくにフランスにおいて顕著であった。外国人選手で編成されたクラブであるキランが1929年にフランス選手権を征したが、以後、1931年にプロ選手の存在を理由にフランスが国際ラグビー・フットボール連盟によって五カ国対抗戦から排除されるにいたるまで、フランスと国際ラグビー連盟との関係は常に波乱含みのものであった。その間、国際ラグビー連盟は保守的かつ独占的態度をとり続けながら、1949年に新しいメンバーの加入を承認する。すなわちオーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ共和国という、イギリスの旧植民地であった国がそれでであった。フランスは1945年に五カ国対抗戦への復帰を許されたが、1951年になって再度除名され、その次に復帰を果たしたのは1978年のことであった。

国際ラグビー連盟の方針もあって、1895年から1987年までの間、ラグビーは世界的な規模におけるスポーツ観戦というビジネスとは無関係のままにあり続けてきた。サッカーの場合は1930年にその最初のワールドカップが開催され、1950年代の後半になるとヨーロッパ選手権さえ開催されたのに対し、ラグビーはそうした道に踏み出すことをまったくしなかった。世界選手権や欧州クラブ選手権の開催も、またオリンピック大会への種目としての参加もせず、国際的な試合は最小限の数に抑えられたまま、わずかに五カ国対抗戦と限定された国際戦があるだけであった。

フランス政府のスポーツ担当省も長い間、こうした現状を追認したままで、むしろ「ラグビーのプロフェッショナル化を一般利益の拡大に反する行為として捉え、その規制を任務とする非営利団体（とくにスポーツ連盟）の網の目をさらに密にする制度を整備する」方向へと動いた（WASER, 1996）。そしてフランス政府は国際ラグビー連盟の活動を一般利益の拡大に貢献するものと判断し、公共事業としての機能を果たさせるべく、段階的にその権限の委任をすることで（1945年オルドナンス）連盟への支援に乗り出したのである。この権限委任は1945年から実施に移され、フランス・スポーツ組織におけるラグビー連盟の役割をいっそう強化する働きを結果としてなした。

1975年10月29日付法律および1984年7月16日付法律はともに、スポーツ活動を展開する組織における責任を、国と連盟との間で分かち合うという基本論理に沿ったものであった。「こうしたシステムをフランス政府のスポーツ部門が取り入れることで、スポーツ連盟という私法に支配される組織を配下におさめ、それらが公共事業の執行に関与することを認めた。かくして政府はスポーツや運動の分野で一定の監督権を行使するとともに、スポーツの世界全体にわたって調整と規制の面におけるさらに大きな役割を担うようになった」（MIEGE, 2004）。国によるこの制度的な「庇護」はとくにラグビーの世界に顕著な効果をもたらすこととなり、俸給を得る者を排除し、競技の国際化と世界規模におけるゲームの商品化を妨げるものとなった。

しかしながら、こうした背景にもかかわらず、「ポケット・マネー」として支給される「試合ごとの報奨金」の額は目に見えて大きくなっていった。とくに選手の移籍金は1960年代に入って急上昇を見る。というのは、ラグビーはフランス代表チームがする試合のテレビ放映によって恩恵を受け、大きな人気を博するに至ったからである（SYDNEY & AUCKLAND）。また1980年代に至るまで経済不況のために職を失う選手が増大したことから、逆に選手の「俸給」が増額される結果を生むことになる。この「灰色アマチュア」の存在は税務当局の問題視するところであったが、それはまた財政的および社会的地位を公式化して裏会計システムからの脱却を願った選手からも問題視されることとなった。選手の多くはその主要な時間とエネルギーをラグビーに割いていたからである（CHAIX, 2003）。興味深いことであるが、同じ内容の問題提起はイギリスにおいても平行して見られた（SHEAR, 1997）。

以上がフランス・ラグビーに見るプロ化過程の第１段階、すなわち「俸給に支えられたスポーツ労働市場における公式プロシステムの誕生」（BAYLE, 2000）である。

２．新しいエージェントの出現とプロ化の加速：1980年～1997年

プロフェッショナル化現象は1980年代の半ばに加速されることとなる。大きな変化が世界的なレベルで生じたためである。1982年からジャーナリストのD・ロードがワールドカップ・ラグビーの構想を練り、オール・ブラックスの元キャプテンであるグラハム・ムーリーの支援を得て、ラグビー界を代表する203名の人の署名を得る（WASER, 1996）。このロードの計画は国際規模の企業からの支援を得たにもかかわらず、日の目を見ることがなかった。その主な原因は、ナショナル・チームに選抜されるという魅力を選手が捨てきれなかったこと、またその選抜過程で連盟が絶大な力を発揮したことにあった。ともあれ、ロードのような民間と経済界主体のイニシアティブ発揮は国際ラグビー・ボードを大いに憂慮させたところで、その結果、ニュージーランドの実業家二人とオーストラリア連盟会長（シドニー市長にしてテレビ局オーナーを兼ねた）が立てた対案を支持する方向に回った。こちらの計画は1985年３月に国際ラグビー・ボードの理事会で採択され、第一回のワールドカップはオーストラリアとニュージーランドが共同で開催することとなった。いずれにせよ、こうして国際ボードが主催する初のワールドカップが1987年に開催され、ラグビーを大きく変貌させるきっかけを与える結果となった。

この第１回ワールドカップはニュージーランドが決勝でフランスを破って優勝したが、とくにメディア的に大成功を収めた大会であった。逆に、財政面では完全な失敗で、組織委員会は534万ユーロという、2003年ワールドカップ予算の５分の１程度に過ぎない額の収入しか達成できなかった。この負の実績は国際ボードをして、アマチュアリズムに凝り固まるその姿勢を修正する方向に働きかけをなし、とくに1988年３月にイギリスで、また1991年の秋に16チームを集めてフランスで開催される大会の準備に大きな影響を与えた。スポーツ的成功と財政的成功を両立させるべく、IRBは二つの組織を設ける。まずはワールドカップの開催とそのPR活動を担当するラグビー・ワールドカップ（RWC）で、これは税制天国と呼ばれるマン島にその本拠を置くことで、これまで英国の税制ではスポーツ・イベントに課せられてきた税金の35％を節約できることになった。もう一つがラグビー・ワールドカップBV（RWCBV）で、これは本拠をオランダに置き、すべての商業的側面を処理する。この二つの組織を持つことでスポンサーの数が大幅に増加し、またテレビ放映権料の増額がもたらされた（注１）。

こうした現金収入の増加は関係者の思惑を膨らますことになり、たとえば基本的にアマチュアとみなされる選手もその恩恵に浴したいと願うようになった。ともあれ、そうして向かえたワールドカップの開催は、スポーツ界における重要なイベントという性格を持つに至り、ラグビーの商業化に関して重要な意味を担うことに

なる。1990年代の初期は南半球の優秀選手が13人ラグビーに逃げてしまう現象が顕著であったが、このワールドカップ開催はそうした選手の価値を高める結果となり、15人ラグビーに向けられるスポーツ界以外の分野からの資金援助が大幅に増加することになる。

第3回ワールドカップは南アフリカで行われた。当時、この国はフレデリック・デ・クラーク大統領の下、政治的社会的な改変期にあった。南アフリカでの大会において、ラグビーのプロ化への道が決定づけられる進展が見られた。競技の間、選手とオーストラリアの資産家ケリー・パッカーとの間で交渉がなされた。後者はラグビーの世界サーキットの実現に意欲的な人で、1977年にクリケットの世界プロ・サーキットを実現した実績に関して大いに注目される存在であった。パッカーの計画は大きく前進し、たとえばフランスチームの選手は1995年のワールドカップ中にコミュニケを発表し、彼らの高い関心を示して見せたほどであった。

こうした状況を前に、国際ラグビー・ボードは防御一辺倒の立場に追い込まれ、ハイレベルのラグビーにおけるアマチュアリズムを終焉させることとなり、ついに1995年8月27日、「ラグビー・オープン」を公式にスタートさせる。この方式では、各国の連盟がそれぞれ、アマチュアかプロかの選択をすることになる。国際ボードでアマチュアリズム問題を検討する委員会の長であったウエールズのヴェルノン・パフは、こうして新たに取られた決定の不可避な性格を強調するに至る。実際、アマチュアスポーツにとどまることは国際ラグビー・ボードにとっても、エリートによる競技という性格を維持する上で困難なことであった。同時にこの選択は自らにも跳ね返ることとなり、爾後、国際ゲームはもとより国内ゲームをも含めて、国際ラグビー・ボードとそのメンバー連盟のコントロールが可能になるよう図っていく必要があった。

この公的な身分認定はプロ化過程の第二段階と考えることができる（BAYLE, 2000）。ラグビーの場合、「諦観的なプロフェッショナリズム」（WAHL, 1998）という外見を呈してきたのであり、プロ選手の制度化とは、このスポーツにおいて指導的な立場にあった保守的指導者に独占的立場を放棄させ、ひいては国際ラグビーの監督権限を弱体化させるという意味を持つものであった。

この決定を下した国際ラグビー・ボードの会長は、当時のフランス・ラグビー連盟会長であったベルナール・ラパッセに他ならなかった。極めて逆説的なことながら、この決定に続いて、同じ会長はフランス国内におけるアマチュアリズムの維持を宣言しなければならなかったのである。

この新しい状況を前に、プロ・ラグビーでの独占権を広げるために当時のFFRが取った戦略として、連盟の中にプロラグビー部門を管理する委員会を設置し、国内でのその管理を一極に集中させることであった。それが暗黙裡に目指した目的は、地域ごとにプロのチームを作り上げることであった。この計画に選手を引き入れるために、FFRはフランスチームに属する最優秀選手の中から幾人かを選んで有給化するという動きに出た。それは南半球の各地で行われているところからヒントを得たものであるが、北半球ではまた別の問題を生み出すことになった。選手を「所有する」クラブ、ラグビーが産み出す果実、それに「ナショナルチーム」というラベルの「所有者」である連盟との間の確執がそれである。

実際のところ、フランスの大クラブの会長は、彼らの席をFFRの地方委員会の会長に譲る気は持っていなかった。後者は直ちに動いて、フランス・ラグビー文化の核となる基本の要素としてのクラブ選手権の運営に大きな価値を置く動きをなした。これに対して大クラブ会長たちが取った動きは、彼らが所有するうちの最優秀選手とプロ契約を交わすことであった。ここにはじめて20名ばかりの国際レベルの選手がフランス連盟とクラブとも労働契約を結ぶこととなったのである。クラブはこうして逸早くラグビー・プロクラブ・ユニオンとして組織され（1995年12月）、青少年スポーツ省に対してエリート・スポーツ競技を統括するリーグの創

設を求め、同時に当該競技にかかわる権限の一切をユニオンに認めるよう申請を出した。こうしてエリートクラブが一つのリーグをつくるというクラブ指導者の意志は、必然的にスポーツ・イベントから得られる利益の配分構造に改変を迫ることとなり、ここで一気にクラブと連盟との間の係争が表面化する。

国がスポーツ連盟に対して経済的支援をするということは、連盟の活動に対して一定の裁量権を国が手にすることにつながる。青少年スポーツ省が職権によって行う財務調査を前にフランス・ラグビー連盟は苦しい状況を認めざるを得ず、当時のスポーツ担当大臣ギー・ドリューにとってフランス・ラグビー連盟に対して1996年に国が行った財政援助は、連盟が行う事業とのかかわりあいを必然的に持つものであった。こうして国の主導でラブギーを管理する全国常務委員会が設置され、それは1996年6月15日にエリート・ラグビー全国委員会（CNRE）の創設へとつながり、この委員会が爾後、エリート部門を管理することとなり、連盟はアマチュア部門を管理することとなった。ここにフランスのラグビー史における一大転換が成し遂げられ、こうしたことが1998年7月24日のプロリーグ創設へと帰結していくことになる。

この委員会が行った最初の仕事は、プロの選手権大会の運営管理に関して連盟の承認を取り付けることであり、またヨーロッパ選手権の創設であった。実際、英国のほとんどのクラブ、またイタリアの若干のクラブは多かれ少なかれ、財政的な健全化を図るためにプロフェッショナルな組織を必要としているという点において、フランスのクラブと同じ状況にあった。この問題に関してFFRとCNREとの間で意見の相違があった場合、フランス・スポーツ・オリンピック委員会（CNOSF）の裁定を仰ぐ必要があり、とくにプロ競技の管理条件に関するCNREの権限をFFRが尊重しない場合がそうである。連盟はそれゆえ青少年スポーツ省との関係において、決定権の減少に甘んじさせられることとなった。プロ化の過程が早く進行したこの期間を通じて、ラグビー選手協会（AJR）とトレーナー組合が生まれたことも記しておかなければならない。

第4回のワールドカップはウエールズとイングランドで開催されたが、この大会では何よりもまず、収支バランスを最大限重視して運営されることとなった。オーストラリアが優勝したこの大会はとくに経済的な成功において顕著であった（収益は6100万ユーロとされる）。この成功は「新しい国際プロラグビー体制」の経済的可能性を示すものとなった。

3. 新しいラグビーシステム：1998年～2004年

1998年1月にラグビー選手協会が純然たる労働組合である全国ラグビー選手組合（SNJR）に組織を変え、また1998年7月にCNREがナショナル・ラグビー・リーグ（LRN）に改組したことは、この種目のプロ化過程における第3段階を画する重要な出来事であった。

LRNの創設は、クラブ・トレーナー・選手・青少年スポーツ省（MJS）、およびメディアがFFRに対して「攻撃的な」連帯をもって行った圧力行使の結果ということができる。この連合が主としてもたらしたものは、FFRに対するクラブの独立性確保、LNR内部におけるトレーナー職の認知（トレーナー集団は常任委員会で一つの席を確保した）、給与および労働条件の改善に対する選手側の期待表明であった。こうした要素に加えてなお、プロのラグビーを厳格に管理したいとするMJS側の立場があり、より高い視聴率とより魅力にあふれた大会を期待するメディア側の要望があった。それゆえこの組織的改革により「プロフェッショナルによる選手権大会に固有のスポーツ的および経済的運営の実現」（BAYLE, 2000）が図られることとなった。LNRの規約はクラブに過半数の決定権を与え（58票中の48）、これによってクラブの志向する戦略を実施に移すことが可能となった（注2）。

数多くの経済的および法的な指標がこの戦略の実施方を支えることとなったが、経済的な指標として次の各点を述べることができる――

1）LNRによる選手権大会のマーケティング

と管理：

この組織改革により、LNRとクラブの収益増加が最初のシーズンから可能となった。LNRとクラブに分配される総額は1997/98年のシーズンと比較して、およそ273％の伸びを記録し、とくにテレビ局CANAL＋と交わした年間1070万ユーロの契約がもたらした効果は甚大であった（BOLOTNY, 2000）。2000/01のシーズンでは総額で8480万ユーロという数字を達成し、これを3年前の4300万ユーロと比較するとその伸びの重要性が理解できる。

2）経済的な目的を有する新しい大会、すなわちLNRによるリーグ・カップ大会の発足を促した。

法的な指標については以下のとおりである――

1）LRNは認可されたるモデル契約によってプロ選手の身分定義をするようになった。

2）1901年法団体（いわゆるNPO法）からスポーツ目的株式会社（SAOS）への移行により16のクラブがプロフェッショナル団体としての資格保持するようになった。

3）MJSが認可する選手養成センターの設置をエリート・クラブ（一部リーグの16クラブ）に対して義務づけた。リーグはヨーロッパ・カップ大会から得られる収益の一部をこのセンターの運営資金に当てる。ヨーロッパ・カップは上級のクラブとそうでないクラブとの間で付加的収入の有無という違いを生むが、上の措置はこのヨーロッパ・カップがもたらす収入差を実質的に低減させる目的を有し、弱小クラブにも選手養成機関の実績を向上させるための動機付けを与える重要かつ巧妙な手段としての意味を持っている（CHAIX, 2003）。

4）国の権限委任に関する特別の条件を定めるためのFFRとの協定交渉を可能にする。

FFRとLRNとの新たな関係はSNJRとLNRの間での協力関係を生み出すこととともなり、フランス・ラグビーの主たる構成員によって用いられる流動的な戦術に関する伏線を構成することになる。この協力関係は、一定の環境的条件、あるいは当事者の思惑との関連において形づくられる。SNJRはこの協力関係から利益を得られることについて十分な認識をしており、これに対して選手はLNRの総会で行使される58票のうちの1票しか制度的には手にしておらず、また常任委員会を構成する11票についても1票を手にするだけである。また制度的な観点からすればトレーナー組合（TECH XVと呼ばれる）も同数の票しか手にしておらず、強い立場にあるとは言えない。ジャーナリストの間で対等に扱われることがなく、とくにストライキ権を行使して実力行使に出るという可能性を持っていない。

4．フランス・ラグビーの将来

フランス・ラグビーが「プロフェッショナル・リーグの創設とともに完全な市場原理の導入によって、その経済的および経営的な運営を最大効率化する」（BAYLE, 2000）ことを目指す上で、常にわれわれは三つの問題を前にしている。リーグ、連盟、選手組合という、ラグビーの主要構成機関3者の関係は極めて複雑な様相を呈しており、それらは国と国際ボードから管理されているというものの、その関係をうまく図ることには常に困難がとも伴われる。連盟とリーグの関係はフランス政府が発した法律によって規定されるが、とくに2004年7月の法律は連盟の影響力を維持する目的において公布されたもので、プロリーグが保有する経済的な活力と権能を保護する目的を有している。こうしてフランス・ラグビーの現行組織は国の代表権者がする裁定によって大きく特徴付けられる。事実上、法人格を備えたプロフェッショナル・リーグの創設を前に連盟の力は衰えるばかりで、それもこれも国が是認の態度を示してのことである。

国内及び国際の連盟機関が能動的に動き出せない状況のなか、リーグはフランスのプロ・ラグビーを振興しようとする計画の枠内で、2004－2005年のシーズンにおいて16チームからなる単一のリーグ戦組織をまずスタートさせ、これ

を2005－2006年のシーズンにおいて14チームに固定させた。

この決定を理解する上には、経済的、人的および政策的な、三つの方向からの分析が必要である。

まず経済的には、このリーグ戦組織は多くの関係者、すなわちテレビ局、新聞界、アナウンサー、それに観客から期待されたものであった。選手権の性格をより魅力あるものにすることは関係者のこぞって願うところで、とくにトーナメントによるフランス選手権では半数近くのチームがシーズン半ばにして戦いの場を失うことから、フランチャイズによる地元試合を増加させることが必要とされた。こうした関係者の願望がもたらす経済的でのインパクトは、何よりもプロリーグに対してその見せる商品の品質改良を迫る結果を生み出した。それなくしては支援を失うことになるからである。

人的側面から見ると、このリーグ戦組織の設立はある種の驚きの目で迎えられたといえる。というのは、それは特定の選手に負担を強いることを条件に導入されたからである。選手は年間49試合に出場が可能で、そのいくつかの試合は代表選手を欠いても行うことができるが、しかしそのことが他の選手にかける負担は相当なものに及ぶ。もっとも、この人的側面はラグビー・システムの経済的な現実から考えると、それほど重大な問題を投げるものでないと判断された。

政策的には、このリーグ戦組織の導入は、FFRとIRBを相手方とする一種の実力行使と考えられてよいものである。セルジュ・ブランコと各クラブの会長は2003年のワールドカップ終了後、連盟とボードからそうした組織の設立に向けての意思決定があるものと期待していたが実現はされず、したがってラグビーのプロクラブは彼らが手にできなかったものを自力で取りに行ったということになる。リーグとクラブはそれらが将来において占めるであろう地位によって、試合日程の決定に関する交渉において一定の付随的な力を行使することを望んでいる次第である。

一方、PROVALEも同様に試合日程の問題、国際選手の二重俸給の問題（クラブと連盟）に直面している。実際、灰色アマチュアの時代はすでに昔語りとなり、1987年に初めて世界選手権で決勝まで残ったフランスの代表選手は、それぞれが約2200ユーロほどの報奨金を受け取っている。その16年後、すでに1995年以来プロ化していたラグビーは、世界を代表する最優秀の選手の収入をまかなう手段を手にすることとなった（注３）。こうしてフランス人選手は準優勝で12万2000ユーロ、優勝の場合は15万2000ユーロを獲得することができるようになり、他の国の選手と同様、フランス人選手にとってそうした収入は別の付加的な収入に関する契約を結ぶ可能性を閉ざすものでない。とくに個人成績（出場試合数）とチーム成績（最終的順位）に応じて与えられるところの収入がそれである。

この代表選手の俸給問題をめぐって、PROVALEとFFRの保守的な連携が議論の対象とされている。現下の問題はプロクラブが彼らに課された義務規定を遵守することに同意し続けるか否かにあり、配下の選手は常に「年度契約」の給与生活者であるという問題がその決断を左右するものとなる（注４）。協定によれば最も優秀な選手はワールドカップ以外の３ヶ月を連盟のために働き、しかもその給与はクラブから支給される。選手がフランス代表に選ばれることは願ってもない経済的チャンスであるが（注５）、フランス連盟からクラブに支払われる金額は低いまま抑えられ、プロリーグは選手の日割り給与に該当する額をクラブに支払うよう望んでいる。ワールドカップのために連盟から支給される補助金は増額の方向にあるが全体としてクラブの満足の行くものでない。しかし現行のシステムでは、またラグビーに関与するエージェント三者の連衡関係からすれば、選手を雇用するクラブが財政的な制度改革を実現する新たなモデルの利益に浴し得る可能性は、近年のうちには望み薄であるということができる。

結語　フランス・ラグビーの一元的統括——神話か現実か？

フランス・ラグビーの一元的統括は現実の問題として可能なのであろうか？　こうした問いかけを発することは、現在のコンテクストを振り返る限り適切なものとしてある。たとえば2007年にフランスで開催される次回のワールドカップの組織運営は、ラグビーの経営と振興に関する確かな方向付けを生み出し得るものだからである。

1980年代から加速化されたフランス・ラグビーのプロ化傾向は、政治的かつ経済的な性格の各種目論見からなる複雑なシステムの漸進的な構造化によって説明される。この20年弱の間に、FFRの寡占状態から、時々の状況によって変化する力関係に基礎を置く構造的な状態へと移行を見てきたわけで、当該の関係三者間での持続的な妥協と共通合意については、合理的なスポーツ調整（試合日程や外国選手のレンタル移籍）、経済的調整（テレビ放映権料の収益分配など）に関して、まだ合意に達するには至っていない。その一方で、フランス・ラグビーのプロに関する規制は、恒久的に、外国選手のスポーツ的および経済的な評価に関してFFRとLNRがある競合関係において、選手組合の戦術は、「競りにかけて」選手の収入を最大化することにある。ある種目を評価するうえで連盟はフランス代表チームの成績を用い、その発展とアマチュアの振興を図る。それゆえ連盟は自らの収入を増加させるべく試合の数を増やすことを希望し、選手に経済的に有利な条件を提示してその参加を募るという戦略に出る。言うまでもなくナショナルチームに選ばれた選手は一定の価値を手にし、クラブとの年俸交渉において有利な地歩を築くが、しかしそのセレクションによって連盟も経済的に利益を得る。また一方、LRNに加盟するクラブは国際レベルの選手の存在により俸給をめぐる一種のインフレ現象に見舞われ、また彼らを国内の選手権大会に動員する試みはますます困難なものとなってくる。

こうしたシステムの経済面およびスポーツ面における弱体化はその大きな部分を、フランスチームの国際レベルにおける威光拡大に期待するFFRとMJSの「保守的」な政策に負っている。国が法令によってLNRを認知することがあっても、MJSはヨーロッパ的なスポーツ概念（アマチュアリズムとプロフェッショナリズムの継続）のもとに、プロフェッショナル部門の自治管理を制限する方向を模索することになる。かくして国の介入はプロ・アマそれぞれが受け入れ可能な妥協点を見出すための仲裁的な立場に位置するには程遠く、プロフェッショナルラグビーのスポーツ的および経済的な不安定さを作り出し、このスポーツが合理的な統括形態へ移行する上での妨げをなすことになるとも考えられる。

注１）テレビ放映権料は６倍になった（250万ユーロから1500万ユーロ）。第１回ワールドカップの17局に対して103のテレビ局が大会を放映した。ただし収益は450万ユーロと平凡な枠内に留まった。ラグビーに関して収益が爆発的な伸びを示したのが南アフリカでの1995年ワールドカップで、総予算4500万ユーロに対する収益は2700万ユーロであった。爾後、放映権の高騰に拍車がかかり、フランスのTF1は2007年と2011年のワールドカップ放映に対し8500万ユーロを提示し、このうちの5000万ユーロ2007年大会用の金額であるが、これは1995年ワールドカップの総予算を超えるものである（因みに2003年の放映権料は2300万ユーロであった）。

注２）クラブ48票（各クラブ２票）、フランス・ラグビー連盟３票、選手代表１票、医師代表１票、トレーナー代表１票、審判代表１票、外部法人２票（クラブ１票、FFR１票）、それにLNR会長１票。

注３）ラグビー主要国では選手と連盟の関

係は契約によって律せられ、両者の交渉は時に非常に厳しいものとなる。ニュージーランドでは独立資格を持つ委員会が、選手が裁判に訴えることを回避する目的で設置されている。ワールドカップ優勝時に12万NZドル（72000ユーロ）を要求したオールブラックスに対して連盟（NZRFU）は5万NZドル（30000ユーロ）を回答し、交渉の結果、ウイリアム・ウエブ・エリス大会での優勝を条件に8万NZドル（48000ユーロ）に落ち着いた。ワラビー（Wallabies）クラブのキャプテンであるジョージ・グレガンが起こしたオーストラリア連盟（ARU）を相手とする係争も同じ紛糾を呈し、この場合は選手が裁判所に提訴するところまで入った。両者は最終的に和解し、1999年に獲得した世界チャンピオンの座を守ることを条件に選手は約13万ユーロを得ることとなった。これらの国では選手の受給金額は公表されているが、強力なチームを持つ英国の場合はそうでない。信頼できる筋によれば、英国ラグビーの代表選手は優勝に際して20万ユーロを手にすると言われる。南アフリカも同様に非公開主義を貫いているが、同国の新聞情報によれば、スプリングボックスは二種類の規定に従っているとされる。スプロングボックスと年度契約を結んでいない選手は試合ごとに最低75000ランド（1万ユーロ）を受け取り、この金額はチーム力の向上や試合相手の人気度に応じて増額される。一方、同クラブと契約関係にある10名ほどの選手は固定給を受領し、試合数や戦績に応じて追加の支給がなされるという。同じ情報源によれば、スプリングボックスのキャプテンであるコーン・クライグはシーズンごとに約17万ユーロを得ている。これはヨーロッパの最優秀選手の給与をはるかに上回る額である

注4）この点については Bayle. E., Durand, C., (2000), Sport professionnel et représentation nationale : quel avenir? In Reflet et perspective de la vie économique, N XXXIX, Sport et mondialisation : quel enjue pour le Xxe siècle, De Boeck, Bruxelles.

注5）2002/2003年度におけるフランス代表選手への支給額は以下のとおり。代表候補300ユーロ、代表1800ユーロ、国内試合優勝3760ユーロ、国際試合優勝4500ユーロ、トーナメント優勝9000ユーロ、グランド・スラム18000ユーロ、2003年ワールドカップ優勝152000ユーロ、決勝進出122000ユーロ、3位91000ユーロ、4位76000ユーロ、予選敗退45000ユーロ、予選4位まで54000ユーロ（資料はLNRとFFRによる）

参考文献

ALLAIN B. WASER A.M. (1996) Pratiques, spectacles et professionnalisation des sports, Rapport GDR/CNRS 1094.

AMBLARD H et coll. (1996) Les nouvelles approches sociologiques des organisation. Paris, Seuil.

BAYLE E. (2000) La Dynamique du processus de professionnalisation des sports collectifs : les cas du football, du basketball et du rugby in revue STAPS n. 52, printemps, pp. 36-60.

BAYLE, COUDERT, (2003) Revue juridique et économique du sport, n 66, pé 64.

BOLOTNY F, (2000) Economie politique du rugby professionnel, Revue Juridique et économique du sport, n 53 et 54.

BOLTANSH L, THEWNOT L (1991) De la justification. Les économies de la grandeur. Paris, Gallimard, Essais.

BOURDIEU P (1979) La Distinction, Critique du jugement social. Paris, Minuit.

BOURDIEU P (1980a) Questions de sociologie. Paris, Minuit.

BOURDIEU P (1980b) L'identité et la représentation. Actes de la Recherche en Sciences Sociales 35 : 63-72.

BOURDIEU P (1997) Le champ économique. Actes de la Recherche en Sciences Sociales 119, 48-66.

CAILLE A (1981) La sociologie de l'intérêt, est-elle intéressante? Sociologie du Travail 3 : 257-274.

CAILLE A (1994) Don, intérêt et désintéressement. Bourdieu, Mauss, Platon et quelques autres. Paris, La Découverte.

CHAIX P, (2003) Analyse économique du rugby professionnel en France, Thèse de doctorat d'économie, Université Pierre Mendes France Grenoble 2.

CHAIX P, (2004) Le rugby professionnel en France: enjeux économiques et sociaux, Ed L'Harmattan, Paris.

CHANTELAT P, LE ROUX N, CAMY J (1998) Sport Economics and Management of Sport Organisations. Sport Science Studies 9 : 74-88.

CHATEAURAWAUD F (1991) La faute professionnelle. Une sociologie des conflits de responsabilité. Paris, Metaillé.

CHIFFLET P (1987) Le pouvoir fédéral et l'accueil des sportifs, Actes des premières journées d'études Sport et changement social, 3-4 avril, Bordeaux : 157-171.

CORIAT B, WINSTEIN 0 (1995) Les nouvelles théories de l'entreprise. Paris, Livre de Poche.

DEMOUSTIER D (1997) Approche économique des associations. In MIRE, Produire les solidarités. La part des associations, Paris : 87-97.

DUNNING E (1994) La dynamique du sport moderne : 1a recherche de performance et la valeur sociale du sport. In : N Elias et E Durming Sport et civilisation, la violence maîtrisée, Paris, Fayard : 281-307.

DUNNING E, SHEJuD K (1989), La séparation des deux rugbys. Actes de la Recherche en Sciences Sociales 79 : 92-107.

ESCOT R. (1996) Rugby pro histoires secrètes, Paris, Solar.

FAURE JM, SUAUD C (1994) Un professionnalisme inachevé. Deux états du champ du football professionnel en France, 1963-1993. Actes de la Recherche en Sciences Sociales 103 : 7-25.

FRIEDBERG A (1992) Les quatre dimensions de l'action organisée. Revue Française de Sociologie 33 : 531-557.

GARCIA H. (1996) La fabuleuse histoire du rugby, Editions de la Martinière.

GASPARINI W (1996) La construction sociale de l'organisation sportive. Champ et engagement associatif. Revue STAPS 43 : 51-68.

GRANOVETTER M (1985) Economic Action and Social Structure : The Problem of Embeddedness. The American Journal of Sociology 91 : 481-510.

HEIKKALA J, KOSH P (1998) Professionalization and Organizations of Mixed Rationales. The Case of Finnish National Sport Organizations. The European Journal for Sport Management 1 : 7-29.

HORCH HD (1994) On the socio-economics of voluntary organisations. Voluntas 5 : 219-230.

HORCH HD.(1996) The German Sport Club and the Japanese firm. What For-Profit Organizations can learn from Non-Profit Organizations? The European Journal for Sport Management 1 : 21-34.

HUTCHINS, PHILIPS (1997) Selling Permissible Violence. The Commodification of Australian Rugby League 1970-1995. The International Review for the Sociology of

Sport 2 : 161-176.

ION J (1998) Clubs d'athlétisme et professiormalisation. Une étude de cas. In J Camy et P Chazaud, La professionnalisation des organlsations sportives : éléments pour une analyse internationale comparée, Paris, L'Harmattan.

LAVILLE JL (1997) Création d'activités et emploi : l'association, une organisation économique originale. In MIK Produire les solidarités. La part des associations, Paris : 204-214.

LAVILLE JL, SAINSEAULIEU R (1998) Les fonctionnements associatifs. Revue Internationale de l'Economie Sociale 268 : 65-70.

LAZEGA E (1996) Arrangements contractuels et structures relationnelles. Revue Française de Sociologie 37 : 439-456.

LOIMD G (1995) Crise du bénévolat ou bénévolat en crise? Un aspect des tensions et des contradictions au sein des clubs sportifs. Acte du Colloque Sport, Relations Sociales et Action Collective, 14-15 oct. 1993, Bordeaux, Maison des Sciences de l'Homme d'Aquitaine : 541-555.

MAGUIRE J (1988) The Commercialization of English Elite Basketball 1972-1988 : A Figurational Perspective. The International Review for the Sociology of Sport 4 : 305-23.

MIEGE C. (2004) L'institution sportive, Sport et droit, Cahiers Français, n.320, Sport et Société, pp19-26, mai-juin.

MINTZBERG H (1982) Structure et dynamique des organisations. Paris, Ed d'Organisation.

NIER O., CHANTELAT P., CAMY J., (2004), Les stratégies identitaires des clubs de rugby de l'élite européenne face à la professionnalisation (1987-1997), in Revue Science et Motricité, n. 50, 103-125.

NIER O., SHEARD K., (2000), Managing changes : Economic, social and symbolic dimensions of professionalisation in five elite European rugby clubs, European Journal of Sport Management. vol. 6, n. 2 1999, 5-34.

NIER O., (2001a), Résistance et accès à la professionnalisation dans le rugby de haut niveau le cas du Heriot club d'Edimbourg, La professionnalisation des organisations sportives : nouveaux enjeux, nouveaux débats. L'Harhattan Paris, mars 2001.

NIER O., (2001b), Les formes de professionnalisation dans le rugby européen de l'élite, La professionnalisation des organisations sportives : nouveaux enjeux, nouveaux débats. L'Harmattan Paris, mars 2001.

NIER O (1998) Professionnalisation du rugby et stratégies de clubs de l'élite européenne. Thèse pour le doctorat de l'université Lyon I, juin 1998.

NILSSON J (1996) The nature of the cooperative values and principles. Transaction cost theoretical explanations. Amals of Public and Cooperative Economics 67 : 633-653.

SLACK T (1997) Understanding Sport Organizations. The Application of Organization Theory. Champaign, Human Kinetics Publisher.

SMELSER NJ, SWDBERG R (1994) The Sociological Perspective on the Economy. In : NJ. Smelser et R Swedberg The Handbook Of Economic Sociology, Princeton University Press : 3-26.

SWEDBERG R (1994) Histoire de la sociologie économique. Paris, Déclée de Brower.

TERRET T (1996) Histoire des sports. Paris, L'Harmattan.

THEODOM EI, HENRI IP (1994) Orgamisational Structures and Contexts in British National Governing Bodies of Sport. The International Review for the Sociology of Sport 29 : 243-263.

THIBAULT L (1998) Strategic Planning and Partnerships in Amateur Sport Or-

gamisations. Sport Science Studies 9 : 34-44.

THIBAULT L, SLACK T, HININGS B (1991) Professionalism, Structures and Systems : The Impact of Professional Staff on Voluntary Sport Organizations. The International Review for the Sociology of Sport 2 : 83-99.

THUDEROZ C (1997) Sociologie des entreprises. Paris, La Découverte, Repères.

TREANTON JR (1993) Tribulations de la justice. Revue Française de Sociologie 34 : 627-655.

WLLIAMSON O (1994) Transaction Cost Economics and Organization Theory. In : NJ Smelser and R Swedberg, The Handbook of Economic Sociology, New York, Princton University Press : 77-108.

ZELIZER V (1992) Repenser le marché. Actes de la Recherche en Sciences Sociales 94 : 3-10.